

たはなにかそれを抑制するようなことをお考えになる必要があるでしょう。」しかしながらこの回答を受けて、この実科高等学校の生徒は「他人が考えるほどにはひどく意気消沈しなかつたのである。本物の編集部から手紙を受け取ったというだけでも、ひとつの成果に違ひなかつたからである。：：そのような初心者の体験はともかく作家になる生活のためには必要であり、将来のよりよき成功をなんら否定するものではないからである」と考えたのであつた。しかし、トーマス・マンが一八九四年三月、十九歳で生まれ故郷のリューベックを去ることになったとき、作家としてのそうした「将来のよりよき成功」はまだ確かにかなり遠い漠然としたものであつた。

一八九三年五月に第一号、そして七月に二号目の学友雑誌『春の嵐』を刊行し、その翌年三月、トーマス・マンは卒業二年前の七年生でカタリーネウム実科高等学校をやめてしまう。彼は、充分長く学校にいたので、一年志願兵の証書は手に入る事ができた。これは、ドイツ軍隊での二年間の奉仕を免れて、一年間だけ志願兵として務めればよいという、市民階級のもてる特典であった。学校は、一八九四年三月十六日に終わりとなり、彼は即座にリューベックを去り、母たちのいるミュンヘンに移っていく。このリューベックでの最後の一年間はすでに『略伝』で見たように、「愉快な思い出」のなかにあり、学校は「私にはもはやなんの期待もかけなくなって、私を私自身の運命に任せてしまった」のであった。実際、彼の学校での成績も芳しいものではなかった。卒業資格証明書を受け取ったとき、そのあまりのひどさに彼は愕然とした。宗教、ドイツ語、ラテン語、フランス語、英語、歴史、地理学、数学、自然科学が「良」か辛うじて合格の「可」であった。そして品行の、唯一の「優」が塗り潰されて、「辛うじて優」に変えられていたのだった。『ブッデンブローク家の人々』のハノーのように、トーマス・マンもまた、暴君的教師たちの非難を正当だと感じ、罰が自分に与えられるのがふさわしいと考え、先生たちの、先が悲観的将来になるだろうという自分に対する予言を信用出来るものと思つたとしても当然だつたらう。しかし今、私たちは、彼がその前年ノーベル賞を受け、生活の頂点に立つて青春時代を振り返って書いた、この『略伝』の文章にそれほどよいかかつて考えてはならないだろう。確かに彼の苦痛や拒絶を感じた学校から、彼の初期の憂鬱さや意気消沈は生まれてきたものであろう。しかし、彼は心の中では決して自分になにも期待していなかつたわけでもなかつた。当時から、すでに作家になりたいという、或いは作家になれるという前向きの気持ちに彼に全くなかつたわけでもなかつた。もはや学校は最後となつたが、彼には新しい夢がなかつたわけではない。そのことを示す次のようなエピソードをトーマス・マンは『自分のこと』の中で書いている。『春の嵐』のなかの『幻想』を『彩色スケッチ』と題して、リューベックのある新聞に匿名で送つたところ、この作品は新聞には不向きです、それは新聞に掲載する限界を越えています、という回答とともに、次のような言葉を彼は受け取つたのである。「もしあなたがこのような思いつきを何度もなさるのなら、確かにあな

になつて、その風変わりな散文体を私の日記や小説的習作のなかでいかにも盲従的にいそいそと狂いなく模倣し、まさしくその点にのみ芸術家的満足を見いだしたことを覚えていきます。」まさに模倣への贅辞である。しかしバールの影響はただ文体だけではない。バールのこの散文は自然主義の終焉を告げ、「時代の自然科学と社会学とに基づく因果律を文学的表現の基準として適用することをもはや認めなかつた。彼は、一切の決定論的思考を退け、これに代わつて、作家に心理分析を要求した。△繊細▽な心理のひだに分け入り、△神経過敏▽な反応を分析することを要求した」（クラウス・シュレーター『トーマス・マン』）のである。バールは神経質で感じ易いという点に魅力を感じ、「繊細な心理学」という新しい心理学を主張した。こうしてこのデカダンスの時期、「繊細」とか「神経過敏」という言葉が時代の合言葉となつたが、トーマス・マンもそうしたバールの影響を最初の詩『二度の別れ』や『幻想』のなかにはつきりと見せている。『幻想』には確かに、文体や「繊細な心理学」においてバールの影響がいたるところに存在している。しかしこのバールの文学理論はフランスの作家で心理学者のポール・ブルジェの理論の受け売りだつた。直接トーマス・マンがブルジェを読んだのはミュンヘンに移つてすぐの頃からであるが、彼のデカダンで退廢的な心理学の影響はトーマス・マンの初期の短編小説や『ブッデンブラーク家の人々』なかにはしばしば見て取れるのである。さて最後に、小説『幻想』の影響という点についてももうひとつ付け加えておこう。この小説のモチーフは北ドイツの詩人テオドール・シュトルムの詩『女の手』を思い起こさせはしないだろうか。「あなたの悲しみ、よく知っている／あなたは口に出さないけれど／唇の影、そつと隠していることを／薄青い手が語っている／私のこの目が恋い慕う／美しい手に、眠れない夜／胸の痛みの上に置かれた／嘆きのしるしが微かに現れている。」「幻想』のテーマはこの詩に端的に語られていよう。数少ないトーマス・マンの初期の詩においては、誰しもシュトルムの抒情性を嗅ぎ取ることができると思われるが、この時期の彼のシュトルムへの熱中は一九三〇年の『テオドール・シュトルム論』においても指摘されている。だが、この散文の根本モチーフである裝飾的なスケッチ風の印象は、この當時の流麗なユーゲントシュティール美術や初期象徴派の絵画を思い起こさせることも確かな事実であろう。

ほど言語はこの作品では作品のモチーフを的確に表現しているのである。うてなの中の「淡い」黄金はそれをつかむ「乳白色」の少女の手に対応するし、どんすの中に「織り込まれた」葉や花は指に「まわりついている」指輪に似ている。また、この作品には色の表現が多いことに気付くし、当時流行しつつあった、なにか丸い、曲線模様で波型の、流れるような雰囲気に包まれている。色模様、くねくねと絡まる草模様は当時の若者の芸術様式ユージェントシュティールの象徴だった。例えば、「織り込まれた葉や花が斜めにきざきざをつくり、まるまり、絡まる」という表現、そして「うてながすんなりと伸び上がり」、それを手は「ゆるやかに」包むという表現、まさしくトーマス・マンは当時の流行に敏感な若者だったことが分かる。そしてこのスケッチはトーマス・マンの最初の散文として、後の叙事的散文の大家としての彼の構成を必ずしも見せるわけではないが、少々虚偽らしい情熱とか感傷性とともに、雰囲気を表現する点、知覚力、観察や描写の仕方、具象性への方向、心理的表現の芽生えなどという、後の彼の語りの作風につながるものを暗示していて私たちの注目を引く。

ところでこのスケッチをトーマス・マンは日記とか自伝的著作において珍しくどこにも指摘していない（『自分のこと』において「彩色スケッチ」という表現はあるが）。しかし、小説『幻想』は、十八歳のトーマス・マンがどんな文学上の影響を受けていたかを明らかにしている。小説の冒頭には元々、「天才芸術家ヘルマン・バルに捧ぐ」という献辞が置かれていた。ヘルマン・バルは十九世紀末のウィーンにおいて自然主義を失脚させ象徴主義を唱えた文学的心理的印象主義理論の提唱者で、ウィーン世紀末文学の指導者であった。おそらくトーマス・マンはヘルマン・バルの理論書『自然主義の克服』（一八九一年）のことが念頭にあって、このような献辞を捧げたのであろう。「バルの最初の象徴主義の散文は十九歳の自分の文体を染め上げた」とトーマス・マン自身、一九二〇年に認めているし（クラウス・シュレーター『トーマス・マン』）、また、『自分のこと』においては彼は次のように言っている。「：私個人についても、今日まですでに長い間、私のものと見分けられる個性的な文体があることが陰で言われていますが、創造的な欲求がもつぱら模倣としてしか目立たない時期がありました。今でも私は、学校にいた頃、あのヘルマン・バルの率いるウィーン象徴派と当時初めて接触するよう

て示されている。今また、そうした過去の風景と同じものが幻想的に浮かび上がっているのである。その後また、この幻想は新しいダイナミックなイメージの表出によって消えてしまう。「ゆつくりとうてな底から真珠が一粒解き放たれて、ゆらゆらと浮かび上がる。それがルビーの光の領域に入り込むと、血のように赤く燃え上がり、水面でいきなり消滅する。すると邪魔が入ったようにすべてが消え失せて行く。」真珠（泡）が表面に達すると、幻想は消え去り、それも「血のように赤く」燃え上がって消えるという。主人公の激しい思いが一瞬のうちに消え現実に戻される表現としては、これはなかなか凝っていて面白い。また、先程の手の血管が「淡青色」で生や情熱を意味したというが、色で言うと、血の「赤」は結局を表すと言ってよいだろう。そして、おそらく作家であろう「私」は、疲れて椅子の背にもたれ掛かる。するとかつての辛い失恋の思いが鮮明になってきて、「きりきりと苦痛が走る。」しかし後のトーマス・マンだったらありえないような平板な文章がその後続く。「しかし私はいまやあのとときと同じく確実に知っているのだ——君は私を愛したではないか：だからなのさ、私が今泣けるのさ、私が今泣けるのは。」このように、幻想が思い起こされたことに、またこうした作品が描かれることに凱歌のようなものが示されている。思い出が、失恋の思いが鮮明に蘇るのは「君は私を愛したではないか：だからなのさ、私が今泣けるのは」と最後に説明されるが、これは本当であるかどうかは定かでないし、それは問題ではないのである。

主人公の青年には神経質ないらいらや追われるような思いがあつて、こうした過去が呼び起こされたのであろうが、この物語は全体的に、過去の恋の情熱の瞬間的で印象的な現在化となっている。詳細をニアンスで把握して描写しようとする姿勢があり、叙述的というばかりではなく、暗示的な文章が多用されている。最初の散文的な並列的文章は次第にますます短い文章に変わり、感情的印象的な文章に変わっている。小さなスケッチ風の習作であり、また散文でありながら、この作品には若いトーマス・マンの言語的才能の素晴らしさが発揮されている。彼の後の作品にしばしば見られる様々な文体の混交の最初の例として、この作品は言語的構成の綿密さをすでに表しているのである。彼はこの作品について、後に「彩色スケッチ」と呼んだが、その言葉を受けるなら、この作品には「彩色言語」が駆使されていると言っても差し支えなからう。それ

「幻想」は「散文スケッチ」という副題をもち、現存するトーマス・マンの最初の散文小説であり、ひとりの青年の過去の愛が、つまり別れに終わった愛が思い出として描かれている。この短いスケッチ風の物語では夜、煙草の煙に外からの空気が加わる落ち着いた平安のなかにあつて、ひとりの青年がのんびりと「奇妙な煙文字」に戯れようとするとき、ふと心の内部に思い出される過去が描かれる。最初の段落の空間的・時間的狀況（「煙草の煙」「書き物机」「ランプ」そして「目覚め」と「夢」）は、第二段落になるとすぐにも、それに反発するようなものに変化している。「私の後ろで椅子の背がひそかにかからうようにびしつと音を立て、それで急激な戦慄のようなものが私の全神経をつつぱる。」しかしまた、次の第三段落になると文体は変わっていく。つまりなにやら、この青年をぼんやりさせないような過去が激しく立ち現れてくるのである。「五官のすべてに狂おしい運動だ。熱っぽく、神経質に、狂気じみて。物音という物音ががんと響く。そしてそれらすべてと纏れ絡まって、忘れ去られていたものが立ちのぼって来る。」過去の幻想が、かつて見たこと感じたことが彼の思いのなかに浮かんでくるのだが、辺りが暗いために、その幻想のイメージはますますはつきりと広がっている。「いまやそれが出現する、まことに明瞭に、まるであのときのとおり、絵姿が。偶然の芸術品が。…実のところ全体像ではない、けれどもあのときのように完全な形だ。けれどもかぎりなく暗がりのなかに溶け込んでゐる…。」すべてが動き始め、感情のこもったような言葉が続き、常軌を逸したような感傷の、過去の思い出が鮮明にのぼってくる。それは、「半ばまで淡い黄金に満たされている」細いクリスタルのうてな（半ばまでワインの入っている細いガラスのワイングラス）、その脚部の細いところをゆるやかに包むようにつかんでいる手、そしてその指にはいぶし銀色の指輪があり、その指輪には「血を流す」ような赤いルビーがついている絵姿である。腕全体ははやけて輪郭が分からないとあるが、「華奢な手首」とあるから、明らかに少女の手であろう。そしてその手は乳白色で、そのうえ淡青色の血管が目立ち、そこに生命が脈打っていて生命と情熱が象徴されている、という。今や、かつての恋の情景が鮮明に呼び起こされる。かつてのように、私の視線は彼女に愛の懇願をする、そしてそれを彼女の手はひしひしと感じる。ここには愛の緊張関係が、愛の要求とその拒否が手の動きによつ

その最後で「ハインリヒ・ハイネは、決して善人Vなんかではなかった、ただ偉大なV人間だったのだ。——ただ……」と確信をもって明言する。「パウル・トーマスが発表したのは、詩と散文であった。彼の手本になったのは、ハインリヒ・ハイネだった。彼は、ハイネの歌曲むきの拍子をまねて詩をつくり、また最初の幾編かの批評的文章においてすでに、嘲笑と揶揄とイロニーとのあいだを漂うハイネ独特の論争文の調子を模倣することに成功している。しかし、トーマス・マンは、当時すでにハイネから、抒情詩や批評文の形式以上のものを学び取っていた。すなわち、彼はハイネの散文作品をすでに知っていたのである。そしてハイネの文化批判的な見解との様々な類似点は、トーマス・マンの全作品にわたって確認することができるのである。」(クラウス・シュレーター「トーマス・マン」)。若いトーマス・マンにおけるハイネの影響が見逃すことのできない注目すべきひとつの出来事であることを「春の嵐」は語っている。

しかしこの当時のトーマス・マンの受けた直接の影響では兄ハインリヒからのものが最も強かったと言えよう。ヘルマン・バルやブルジェ、ハイネ、シュトルムらからの彼の影響はすべて兄を追った結果であるといっても差し支えなからう。「春の嵐」の社会的反抗も、この年齢には有りがちなこととはいえ、やはり兄ハインリヒの影響なのである。当時兄は、自分の本性のままにボヘミアンであり、生まれながらの「緑の車に乗ったジプシー」だった。彼は、自分が父の希望に従って家業を続けることができないことを悩んでいたが、一方では、リユーベックの「市民的」世界に対して、激しく弾劾し敵対的な態度を取っていた。そのために兄ハインリヒもハイネを信奉したのであった。

④短編小説「幻想」(一八九三年)

さて、ここで雑誌「春の嵐」第二号に発表された小説「幻想」について少し詳しく説明を加えておこう。この小説はフィッシュャー版トーマス・マン全集第八巻所収の「小説集」の冒頭に掲載され、トーマス・マンがミュンヘンに出てきて作家として身を立てる以前の、学生時代の彼の精神を示す最も代表的な作品である。

嵐が埃だらけの自然の中に吹き込むように、私たちは言葉と思想とをもって、私たちに抵抗する埃まみれの脳髓、無知、偏狭にして高慢なる俗物性の充満のなかへ躍り込もう。それが私たちの雑誌の望むところだ。それが△春の嵐∨の望むところだ。」このようにこの雑誌の巻頭言が「学校とブルジョア的環境とを批判し、若者たちを鼓舞する反抗精神をちらつかせていた」(クラウス・シュレーター「トーマス・マン」)内容だったため、トーマス・マンはこれに自分の洗礼名のパウル・トーマスと署名し、この雑誌に載せたいいくつかの詩も同様の署名をしている。「高等学校第二学年のとき革命的な傾向をもった最上級の生徒たちと一緒に発行した『春の嵐』と称する、学校というものにはあまりそぐわない学友雑誌では、私は主として哲学的扇動的な論説家として光っていた。」(「略伝」)。

この雑誌の総合編集者トーマス・マンは煙草を吸い、シーザーの本を読むような気取った生徒だった。しかしリユーベックにも申したいというこの雑誌は一八九三年五月に第一号、七月に第二号を出しただけで廃刊になった。第一号にはトーマス・マンは、先の序文の他、「二度の別れ」という詩とイプセン論の二編を寄稿している。これらは現存していないので、内容については定かでないが、詩の方はその年の十月に当時の最も現代的な文学雑誌『社会』第九号に今度は本名で転載された。これはトーマス・マンの青春告白詩であり、この後散文作家として大成していくことになる彼の若い頃の数少ない詩のひとつである。韻を踏むこともなく、ぎこちなさが目立ち、独創性もあまり感じられない詩であるが、ここには確かに、青春の一齣が北国の抒情性の中に息づいている。続いて第二号はパウル・トーマスの単独発行となるが、ここに彼は「夜」「詩人の死」のふたつの詩と、評論「ハインリヒ・ハイネ、善き人」、そして短編小説「幻想」の四編を掲載している。

ところで「春の嵐」に掲載されたこれらの作品の大きな特徴を挙げるとすれば、多くハインリヒ・ハイネへの賛歌がみえることだろう。詩「詩人の死」の冒頭は明らかに、「歌の本」のもつ自由韻律と韻の完全な模倣である。また評論「ハインリヒ・ハイネ、善き人」では、「ベルリン日報」に載ったスキピオなる人物の、俗物的なやり方での、つまりルソー信奉者で善良なるプロテスタントだから、少々の私生活は別にして善い人物だとするハイネ擁護に、トーマス・マンは反駁し、

この友情は、△手当たり次第のもの▽に対して、特に△学校▽や教師たちに対して気まぐれな、引かれものの小唄じみた嘲笑や軽蔑を浴びせるとなると、その真価を發揮した。」（「略伝」）。

すでに「略伝」で見たように、そうした学校に対する反抗、嘲笑は年上の仲間の影響もあって次第に文学的反抗運動に変わっていった。「私は学校というものが嫌いで、学校の要求には最後まで応じなかった。学校という環境を軽蔑し、その権力者たちのやり方をけなして、早くも、学校の精神、訓育、訓練法に対して一種の文学的反抗運動をやっていたのである。」マン家の伝統や家庭から解放され、また「学校になにも期待しなく」なって学校の課題などの心配もなくなり自分自身の運命に身を任せるようになったトーマス・マン、彼には以前からその兆しを見せていた創作活動が急に活発化してくる。彼は先の書籍商の息子オットー・グラウトフやコルフイツ・ホルムといった年上の友人と文学活動を始め、一八九三年五月には学友雑誌を刊行する。その雑誌は「春の嵐」という名で、「芸術、文学、哲学のための月刊誌」という副題をもっていた。印刷され、きれいな花縁取りで飾られた雑誌であり、その巻頭にはパウエル・トーマスという名で次のような「序文」が書かれていた。「正午だった。放課後。一時と二時の間。私はまだ家に帰る気持ちにならなかった。そこで、シーザーの本を脇に、そして甘いゾルト煙草ボスタンジヨグロを唇に挟み、通りを抜けて市門の外の郊外へ出て行つた。…ひどく暖かい春の日だった。暖かかったので、私のまわりの芽や花の蕾みはみな、明らかにその中でもがいているようだった。なにもかもが渴望し、かつ疲れているようだった。…そして風のそよぎもなかった。この無気力な無味乾燥のすべてのなかにあっても、生は非常に認められることの少ないものであつてはならない。私たちの由緒あるリユーベックは立派な町である。おお、全く素晴らしい町よ。だがしかし、私にはしばしば、あたかもこの町が埃にまみれた草原に似ているかのように、そして力強く生を窒息させるような被いから掘り返す春の嵐が必要であるかのように思われる。というのは生はそこに来ているのだから。確かにそのことは、積もった埃の中から若々しく、たつぷりの若々しい力と闘いの意気もち、たつぷりと偏見を離れた見解と輝くばかりの理念に包まれて、盛り上がって来るひとつひとつの緑の莖に認められよう。春の嵐！ そうだ、春の

の感銘も残している。ゲートルに比べて薄幸にして誤解されることの多かつたシラーの倫理性、道徳性が彼の心を捕らえたのである。一九五〇年に行われた講演『私の時代』における彼の若き日のシラー熱狂への回想はいつの間にか、リユーベックの抑圧された保守的状況への批判につながっている。シラーの影響によって、トーマス・マンの文学に批判精神が生まれた、と言つてもよいかもしれない。

③学友雑誌『春の嵐』（一八九三年）

トーマス・マンがリユーベックに残つたのは「学業にけりをつける」ためだけであつたが、彼はひとりになると、ますますマン家のもつ重荷から解放されて自由に振る舞い、すでに学校は彼の身の入らぬものとなつていた。一八九二年春、母たちがミュンヘンに移つてから一年が経過した一八九三年春には、彼はヘンペル教授のところに住んでいた。彼はカタリーネウム実科高等学校に入つて五年目になつていたが、まだ三つ目の学年の第二学年下級にとどまつていて、二度留年を経験していた。彼は次のように書いている。「私はギムナジウムの墮落した生徒です。：私はおよそ最上級まで行き着かなかつたのです、第二学年ですでに、ヴェスターヴァルト山と同じほども歳をくつていたのです。怠け者で、かたくなで、とりとめもなく手当たり次第に嘲笑を浴びせたり、伝統のある立派な学校の教師たちからは憎まれていましたが、これは優れた人たちで、私のことを末は必ずろくなことにならないと予言したものでした。」（『鏡に映して』一九〇七年）。そしてリユーベックでのひとりの生活が二年目に入ると、つまりリユーベックの実科高等学校の最後の一年間は、トーマス・マンにはとりわけ「愉快な思い出」となつた。彼は仲間たちの集まりに進んで参加し、機知と教師たちの独特の物まねによって仲間たちを楽しませ、ある種の尊敬を得ていた。「商人になるものと決められて、：私はカタリーネウム実科高等学校に通つたのだが、一年志願兵の資格証明書をもらうところまでこぎつけただけで、すなわち、第二学年に進級しただけで終わりとなつた。この落第しがちな面白くない学校生活のほとんど全期間にわたつて、私は破産して死んだ書籍商の息子と友情を結んでいたが、

の苦惱と偉大」一九三三年)。そのため、トーマス・マンにとってヴァーグナーからもたらされるものは技法に関する実用的なものになっていき、彼はヴァーグナーの音楽構造を小説の構成として用いるようになる。つまり、ひとつのイメージや語の繰り返しによって象徴的意味合いを帯びさせる、というライトモチーフ的手法をトーマス・マンは小説に用い、音楽作品のように響かせ、音楽的に構成することを作品創造の目標とした。それはヴァーグナーのニーベルンゲン連作にたとえた四部作の「ヨゼフとその兄弟」に実現されているが、そのことを目標としてひとりの音楽家の生涯が語られる「ファウストゥス博士」は、必ずしも音楽的構成の面では成功しているとは言い難い作品であろう。

ヴァーグナーと並んで、この時期のトーマス・マンに大きな影響を与えたのは、古典主義の作家フリードリヒ・シラーである。実科高等学校でドイツ語とラテン語を教えていた、この学校ではトーマス・マンには特異な人物にみえた教師ペートケから、十五歳のこの少年はシラーの素晴らしさを教えてもらったのであった。ペートケはシラーの物語詩を他の追隨を許さぬ読み物だと推薦して、「これは諸君が読む手当たり次第のものではなくて、諸君が読み得る最善のものだ」と言った、とトーマス・マンは後に「略伝」のなかで書いている。また後の、「自分のこと」においては次のようにある。「シラーの、特に彼の『ドン・カルロス』の影響を受けて、五脚の抑揚格形式によって書いたドラマ類は、本来の文学的意図にやや近づいていました。：『聖職者たち』と題して、中世に舞台を取り、なぜだか分かりませんが、極端に反教會的な傾向を得意がっていた一作のあったことを今も思い出します。」さらにまたトーマス・マンは、一九五五年のシラー記念講演のなかでは、声を大にして次のように言っている。「『ドン・カルロス』、この誇らしい詩によって点火された十五歳の私の、言葉を通しての最初の熱狂を、いつになろうとどうして私は忘れることができません。それは作家としてのシラー伝の最も魅力的な瞬間を押さえ、大成の域に向かう成熟の戸口に立つ作品であり、彼の全作品のうちにおいて、私が同様の理由から愛する『ローエングリン』が、ヴァーグナーの全作品において占めるのとはほぼ同じ位置と段階を占める作品であります。」このように、トーマス・マンはシラーの「比類ない感動的な抑揚」に感激した。しかしシラーに若い彼は「倫理的警告への感受性」

頃だけだったとはいえ、ニーチェに出会う前の彼のヴァーグナー敬愛は相当なものだった。「ブッデンブローク家の人々」におけるヴァーグナー音楽の体験による知的な魅力の確保、「トリスタン」(一九〇三年)のための「トリスタンとイゾルデ」第二幕の愛の二重唱の使用、そして後年の「ヨゼフとその兄弟」における「ニーベルンゲンの指輪」の壮大なモティーフの借用など、そして晩年になっての「ヴァーグナーの音楽は私にとって終わることのないテーマである」「ヴァーグナーのこ」となると、私はたちまち若返ってしまうのです」(「ヴァーグナーに終わりはしない」一九四九年)という言葉からも理解出来るように、トーマス・マンのヴァーグナーへの関心は生涯ずっと治まることはなかった。すなわち、十八歳の頃のトーマス・マンの音楽への情熱的な関心はヴァーグナーへの熱狂と重なっているのである。ヴァーグナーとは若いトーマス・マンにとって何だったか。彼はヴァーグナーの何に魅了されたのだろうか。ヴァーグナーはロマン主義十九世紀の巨大な総合だった。彼はロマン主義者のように、歴史を素材にし、彼らよりもずっと大胆に情熱的に自己中心的に描いた。彼はロマン主義者たちの混沌とした情緒に耽りながらも、彼らが戯れ掘り起こしていた新しい歴史的テーマを自分の芸術に押しあてた。父の死去、故郷喪失、母や兄、妹、弟の故郷脱出の思いは次第に若いトーマス・マンには、ヴァーグナーの作品のもつ孤独や死、男女の愛や性の問題へとつながっていったのである。当時ヴァーグナーと言えば人々には高く聳え、魔法の坩堝のなかで宗教や性、歴史や無意識を総合的に考える「神にも似た創造者」であり、彼は通俗化した劇と音楽を結び付け、歴史と神話との総合芸術を生み出していた。トーマス・マンは市立劇場のなかで、嵐のようなオーケストラと歌に没頭し、幸福な気持ちに満たされ、「神経と知性の戦慄と歓喜に満たされた時間」を体験した。そしてこの体験は物を書く作家としての彼の姿勢を強く規定していく。しかし、すでに述べたが、次第に彼のヴァーグナー賛嘆には疑問がまざり込むことになる。音楽や文学、絵画、演劇の結合というヴァーグナーの理論は、彼においては戯れに過ぎないという認識にたどり着くのである。「芸術というものは、それぞれの現象形態においてひとつの全体であり完全であって、それを完全なものにするために、それらのジャンルを統合する必要などないのである」とさえ、トーマス・マンは後に書いている。(「リヒャルト・ヴァーグナー

トーマス・マンはこの時期、毎晩のように町のオペラ劇場に通った。この市立劇場は彼の以前住んでいたベッカーグルーベ通りであったのである。すでに述べたことではあるが、マン家の音楽への愛好は母の影響であり、それは人並み以上のものだった。この家にはこの市立劇場の首席指揮者やヴァイオリン奏者も出入りし、ここではしばしば即興演奏が行われていたことが長男クラウス・マンによって語られている。「それは、いつも同じリズムだった。緩慢であると同時に切迫したりリズムだった。いつも同じ半音階のクレッシェンドであり、同じ求愛と誘惑であり、同じ死に陶醉した恍惚に続く虚脱であった。それは、いつもヴァーグナーの『トリスタン』だった。」(クラウス・マン「転回点」)。毎晩市立劇場に通ってトーマス・マンが接したのは、ヴァーグナーの作品だった。彼はいつも劇場の一番安い最後尾の上げ下ろし椅子に腰を下ろし、当時全盛期にあったテノール歌手エーミール・ゲールホイザーがローエングリーンや、タンホイザーや「マイスタージンガー」のヴァルターの役を演じて歌うとき、その田舎風のオーケストラや演出にもかかわらず、聞き惚れ夢中になり、「さしずめフランス人なら有頂天と表現するであろう忘我の恍惚感に浸った」(「リユーベック市立劇場の思い出」一九三〇年)のであった。とりわけ、「ローエングリーン」の公演は彼にロマン主義のすべての戦慄を与えたのであった。トーマス・マンのこの時期のリヒアルト・ヴァーグナーとの出会いは、彼の生涯における「芸術上の重大な出来事」であった。「後になって、故郷の市の劇場が私に与えてくれたのは、私の生涯における芸術的な大事件、つまりリヒアルト・ヴァーグナーの芸術との出会いだった。：当時市立オペラの主役テノールは若いエーミール・ゲールホイザーだった。ゲールホイザーは華やかな声で、タンホイザーやヴァルター・シュトルツィングを歌ったが、それ以上にたびたびローエングリーンを歌った。私は自惚れるつもりはないのだが、当時の魅惑的な夕べにおける私以上に感受性に富んだ、恍惚たる聴き手を市立劇場はかつて入場させたことはなかったはずだと思う。」(「リユーベック市立劇場の思い出」)。

この時期、彼がヴァーグナーのオペラに接したことは、彼のとりわけ初期の文学作品を音楽的なものにし、ライトモテューフ技法による作品を生むことに大きな影響を与えたのである。トーマス・マンのヴァーグナー愛好が最も強かったのは若い

に移っていく。トーマス・マンはそのことを「略伝」のなかで次のように書いている。「間もなく母は、このリューベックにすっかり見切りをつけることになった。彼女は南国や山が好きで、かつて父と旅行したとき知ったミュンヘンを愛していたので、妹や弟を連れて、そこへ移って行ったのであった。後に残った私は、何とかして学業を終えるために、ある高等学校教師の家に寄宿させられた。」

トーマス・マンはリューベックに残り、教師のフーペ博士のところに下宿してカタリーネウム実科高等学校での学業を終えることになった。「私は自分を、自分自身の運命に委ねることにした。その運命なるものは、私自身にとつても全く真つ暗なものであったが、何が何であろうと自分は馬鹿ではないし、健康にも自信があると思っていたから、どういう運命になるかはつきりしないといつても、そのために意気消沈させられるようなことはなかった。」（「略伝」）。ひとりになって彼には比較的自由なときが始まることになる。しかし彼のリューベックでの生活はその後二年間しか続かなかつた。

今や彼は「学校」になにも期待しなくなっていたが、「学業にけりをつける」ために、リューベックに残っていた。最初、彼は英語教師のフーペ博士のところに住んだ。この教師は学校に興味をもたない受け身的なこの学生に魅力的なことを熱心に語りかけ、トーマス・マンの才能や可能性を信じていた。そのためトーマス・マンがひとりリューベックに残るとき、学校が終わるまで自分のところで引き受けようと申し出たのであった。彼はこの夢想的で反抗的な少年に勇気を与え、その天分が学校や世間においてもきつと役立つと信じていたのだった。しかし双方の思わく違いが重なり、トーマス・マンはその後、住まいをティムプ博士のところに移している。ここには多くの生徒が、とりわけホルシユタインとかメクレンブルクの貴族や地主の息子が下宿していた。そしてその後彼は、一八九三年の春にはまたヘンペル教授のところに住まいを移している。トーマス・マンはそこで仲間と付き合い、若者らしい楽しい青春の時を過ごすのである。「私は授業をさぼったが、とにかく、いわば自由の身であったのだし、下宿仲間とも仲良くして、まだ大学生というのでもない彼らが催す時期尚早の学生宴会には時々、愛想の良い陽気な態度で参加したものだ。」（「略伝」）。

世紀半ばからリユーベックで始まった経済の衰退の一掃結でもあった。父が一八六三年商會を引き継いだ時、あの「ブツデンブローク家の人々」に見るように、すでに商會は下り坂に差し掛かっていたのである。「私たちの父、リユーベック市参事會員、大商人にして船主であるヨーハン・トーマス・ハインリヒ・マンは、一八九一年十月十三日に不帰の人となった。派手であると同時に莊重な葬儀が行われ、儀杖兵が行進し、市長と駐屯軍司令官、市参事會や議會のメンバー、そしてその他の名士方が百台もの馬車を連ねて通り過ぎてゆき、商人、船長、店員、水夫、倉庫労働者といった人々の黒だかりの群れが散ってしまったとき、私たちの家族史の中の、栄光のハンザ同盟都市時代に幕が引かれたのだった。」（ヴィクトール・マン「私たちは五人だった」）。

五人の子供を連れて未亡人になったユーリア・マンは四十歳になっていた。商會を手放した以上、彼女はベッカーグルーベ通り五十二番地の家に住むわけにもいかなかった。すでに祖母のあのメング通りの邸宅は売却されていた。いろんな問題が片付くと、その年のうちに、経済的な問題と近くの人々から離れたいという母の思いから、一家はブルク門の外の、郊外のレック通り九番地（七番地としている資料もある）のつつましやかな借家に引越すのである。トーマス・マンにはメング通りの家や家族の住んでいたベッカーグルーベ通りの家の売却も、それほどの悲しみをもたらさなかったし、「つつましやかな」境遇への変化もそれほどの嘆きではなかったようである。彼にとっては両親の家の栄光や確固とした名声は、いまやそれほど大切なものとは考えられなくなっていた。上のふたりの息子は成人もまじかで、上のハインリヒは、すでにドレスデンで本屋の見習いとなって独立した生活を始めていた。娘ふたりは十四歳と十歳になっていて、末の息子は二歳になるうとしていた。自主的で、気性の激しい女性だった母親のユーリア・マンは、いまや自分の人生のために新しい試みを企てた。相変わらず魅力的な女性であった彼女は、今やリユーベックは狭苦しい町であり、もはや好ましいとは思えなかったのである。それには彼女が南国ブラジル育ちであったこともひとつの要因であろう。一八九二年春、リユーベックにどうしてもなじめぬものを感じていたユーリア未亡人は、下の三人の子供を連れて南国の美しい自然に囲まれた芸術の町ミュンヘン

うな気持ちで家業を見ていたかは、この百年祭についての、トーマス・マンの後の回想において知ることができる。「私は、祝賀客たち、代表者たちが踵を接してやってくるのを見、市や港が旗に飾られているのを見、賛嘆の的であり敬慕の的であるこの日の主人公たる父が、市民的活動の百年を世慣れた態度で体现しているのを見たのですが、私は心が締め付けられる思いでした。：当時私は、父や祖父の後継者にはならない、少なくとも皆から暗黙のうちに期待されているような形では後継者にならない、この由緒ある商会をもちや未来へ導いてゆくことはしないであろうということが分かっていたのです。」

〔レクラム百年祭〕一九二八年。兄ハインリヒは勿論だが、「商人になるべく」〔略伝〕実科高等学校に通っていたトーマス・マンも、この頃にはすでにその志気を失っていたことが分かる。しかし、そのことはまた、父親にも分かっていた。父は一八九一年六月に遺言をしたためるが、そこにはハインリヒもトーマスももはや自分の後継者にならないだろうという寂しさが語られている。「上のふたりの息子はその好みである芸術の仕事に向かうだろう、末の息子がまだ揺り籠の中にいるのが残念だ。」（ヴィクトール・マン「私たちは五人だった」）。そして、その後この一家に次々に起こる出来事は彼らの思いを決定的なものにする。つまりそのひとつが、一八九〇年十二月六日の祖母エリーザベトの死去であり、それに伴って起こったあのメング通りの「ブッデンブロークIIハウス」の売却であった。そしてそれに続いて、翌年十月十三日には、父のトーマス・ヨーハン・ハインリヒ・マン市参事会員が死去し、急にマン一家は決定的な選択を責められることになる。その父は享年五十一歳であった。「父は敗血症のために比較的若い歳で死んだ。私が十五歳（！）のときのことである。彼は、聡明で押し出しが立派なために、市中でも非常な名望家として勢力もあり評判も良かったのだが、家業の成り行きには数年前からもう思わしいこともあまりなくなっていて、儀式の華麗なことや参列者の多数なことにかけては近來希なものであった葬式が済んだあと、百年以上も続いた穀物商会は廃業になった。」〔略伝〕。しかし、この商会の廃業はトーマス・マンを、不安な重荷から解放してくれたようである。彼は父の死後になって初めて、自分の習作を公然と人前に出す勇氣をもつようになった。このようにして、父の遺言によって最終的には百年も続いた商会は閉じられ廃業となったが、それはすでに十九

この友人は、ハンス・ハンゼンという名で「トーニオ・クレーゲル」のなかに出て来て、一種の象徴的な生命を得ているものの、実際には後に飲酒に耽り、アフリカで悲惨な最期を遂げた。このほかに恋愛抒情詩を捧げた相手と言えば、あのダンス教授の時間に出て来る茶色の髪を束ねた踊り相手の少女だが、この少女がその後どうなったかは言えない。」あの「トーニオ・クレーゲル」の中でトーニオの幼い頃の友人として登場するハンス・ハンゼンとは、フライシユハウアー通りの商人の息子であるトーマス・マンの「初恋」の学友アルミン・マルテンスである。トーマス・マンは彼に、初恋の詩というべき『ある友に寄す詩編』を書いた。これは思春期特有の同性愛的友情をうたっているが、「トーニオ・クレーゲル」のハンス・ハンゼンに見るように、マルテンスは健康な日常性と活力を象徴する生の代表的人物だった。しかし、トーマス・マンのそうした「初恋」は短期間で終わり、それは「茶色の髪を束ねた踊り相手の少女」に向けられるようになっていく。その少女に捧げられた恋愛詩は「ダンスのパートナーに寄す詩編」というものであるが、トーマス・マンは一八九九年冬、妹のユーリアと一緒にハンブルクの個人ダンスの講習会に参加したことがある。上記の三つの作品——「ペートウスよ、この短刀は痛からず……」「ある友に寄す詩編」「ダンスのパートナーに寄す詩編」——に、シラーの「ドン・カルロス」の模倣と言われる反教會的戯曲「聖職者たち」を加えた四編がトーマス・マンの最初の文学的創作であるが、これらはすべて散逸して現存はしない。また一八八九年十月十四日のマン家のある子守り女にあてた、彼の最も古いものと言われる手紙では、「アイシャ」という戯曲について触れ、彼は自分のことを「抒情詩・戯曲の作家」と署名している。ここには十四歳の少年の冗談めかした、自嘲気味な、それでいてなにか自信のようなものがみなぎっている様子が見えるが、それは、少年の精一杯のひそかな自己主張だったのだろう。

トーマス・マンは学校になじめないものを感じたが、それによって却って多く作品に向かうことができた。兄のハインリヒもまた、父の意思に背いて文学に熱中していて、一八八九年十月一日にはドレスデンのある書店の見習いとして勤めることになる。一八九〇年五月二十三日、ヨーハン・ジークムント・マン商会は百年祭を迎えるが、そのときこの兄弟がどのよ

胸もぴんと糊がきいていたほうがいいという恰好でやらされたものです。監督する体操教師は、赤髭をはやし、鼻眼鏡をかけ、酒の飲み過ぎですっかりしわがれてしまった声で命令をかけていました。」（『私の時代』）。トーマス・マンがこの学校に通ったのは父の考えによるものだった。彼が幼い頃から、子守り女に手を引かれながら、プロイセン皇帝のお召し列車を見に行ったり、若き皇帝ヴィルヘルム二世のリューベック行幸を体験したことがあるように（『私の時代』）、マン家は必ずしも反プロイセン的というわけでもなかった。兄ハインリヒは性格から商会の家業を継ぐことは難しい、それであれば次男に跡を継がせようという父の考えから、トーマス・マンは実科高等学校に行かされたのであった。もともと商会の相続者になると決められて、この学校に通ったトーマス・マンであったが、幼い頃に夢想的で空想的な性格を育まれた彼には、この学校のプロイセン式のしきたりは我慢のならないものであった。彼の「無頓着な態度とか、ぶらぶらと安逸を貪って静かに読書する余暇をもちたいという欲求」が「強制的な勉強を憎悪させて、それを反抗的に無視させる」ことになっていく。彼は学校や教師たちに「嘲笑や軽蔑を浴びせる」ことを得意とし、仲間たちの人気者となった。そしてさらに、彼が「詩を作っている」ということは教師たちの機嫌を大いに損ねることになった。つまり、彼は次第に、「学校という環境を軽蔑し、その権力者たちのやり方をけなして、早くも、学校の精神、訓育、訓練法に対して一種の文学的反抗運動」に向かうようになっていくのである。

このように学校は彼にとって地獄にも等しかったが、それは却って彼の文学的、詩的素質を助長することにもなった。彼はすでに早くから詩作らしきものをしていたが、この実科高等学校に入つてすぐの第三学年下級の時、戯れ半分の詩（アリアの英雄的な死を扱った物語詩『ペートゥスよ、この短刀は痛からず……』）を作つて自慢していたのを教師に知られてしまい、自分の特異性を教師に知らしめることになったことが『略伝』のなかには書かれている。さらにこのエッセイにおいて、彼は自分の最初の文学的習作について次のようなことを述べている。「創作の手初めは子供っぽい戯曲であったが、それを私は弟や妹たちと一緒に両親や叔母たちの前で実演したものである。それから、私の好きなある友人に寄せた詩を作つたが、

の肖像」一九三〇年)。そんなトーマス・マンの少年時代のことをクラウス・シュレーターは次のように評している。「少年トーマス・マンにとって、この母は特に大きな意味をもっていた。彼女の多面的な趣味や才能が彼の最初の八教養体験Vをつちかい、彼女の音楽が彼の夢想を喚起し、彼女の話してくれる物語が彼の空想を刺激したというだけではなかった。彼女の氣質が、彼女のまったりユーベック的でない人柄そのものが、すでに早くから、世慣れた実務家的な名士であった父よりも強烈に、自分は特別な家柄に生まれた人間であるという意識を子供に植え付けたにちがいない。母の像は、トーマス・マンにとって、幼年時代から晩年にいたるまで常に生き生きとしたものでありつづけた。」このように幼年時代から、トーマス・マンは素晴らしい玩具に興じ、人形芝居に没頭し、神話の世界に遊び、母に本を読んでもらい、また音楽好きの母の歌やピアノ演奏に耳を傾け、「空想の自由な力」を養われて夢想的な少年に育っていったのである。

②カタリーネウム実科高等学校(一八八九―一八九四年)

一八八九年、トーマス・マンは「ドクトル・ブセニウス予備高等学校」における特別なことのみならず、六年間を終えて、ケーニヒ通りとフンデ通りとの角の、ゴシック様式のカタリーネン教会のすぐ南側に建っていたカタリーネウム実科高等学校(ギムナジウム)に入学する。「私は学校というものが嫌いで、学校の要求には最後まで応じなかった」と彼自身述べているように、彼は第三学年下級、上級、第二学年下級の三学年を五年かけて進級し、結局はここを中退している。この学校は十六世紀に創立されたリューベックでも最も古い名門校であり、その校舎はプロイセンの兵舎を思わせるものだった。校風も市民的というよりも、むしろ厳しく軍国的だった。後に(一九五〇年)、次のようなエピソードをトーマス・マン自身書いている。「私たち少年は、うっとおしい体育館のなかで、対ナポレオン戦争のために青少年を鍛えようと考えたあの八体育の父Vヤーン先生の、昔から受け継がれてきた器械体操をやらされたものです。さすがに上着は脱いでやりましたが、信じてもらえないかもしれませんが、糊のきいた堅いカラーをつけたままで、そのうえ、出来ることならワイシャツの

再会しようという、前もって心ひそかに固めていた決意を実行に移して、私は大変嬉しく思っています。加えて天が祝福を垂れてくれました。悪天候続きだったのが、当日は上々の好天でした。とくに、少年時代のパラダイス、トラウヴェミュンデの大気を吸ったという思いは「ハムレット」のなかで言われているように、私に心からの満足を覚えさせてくれるVという次第です。」

トーマス・マンは少年時代の早い時期、リューベックの海岸トラウヴェミュンデで、海そのもののような無限な日々を過ごした。しかしいつまでもそうしているわけにもいかなかった。学校が始まるために、彼の帰郷は延期されるわけにはいかなかったのである。後においても彼は、学校での苦労や困難に対する慰めを、海に、バルト海に求めている。バルト海の水浴場トラウヴェミュンデで家族と毎年過ごす夏の四週間は、ずっと彼の最も楽しい一時だったが、彼はここで、自然の深い欲求に身を委ね、海辺を散歩して夢想に耽ったり、あれこれ物事を考えたり、音楽を聴いたり、シュトルムの憂鬱なロマン主義や、シャミツソーの空想小説、ハイネの苦いアイロニーを味わったりして、自由な時間に没頭したのであった。そして彼はますます夢想的・空想的少年になっていくのである。それにはさらに、前の幼年時代でも述べたように、母親の力が大きかった。母は子供たちに、アンデルセン童話や低地ドイツ語のフリッツ・ロイターの小説をしばしば読んで聞かせたり、シューベルト、シューマン、ブラームス、リストの歌曲を歌ったり、シヨパンを演奏したりした。「…とりわけ暇な夕べは、私たちのためによく時間を割いて、居間のテーブルのランプの下で、フリッツ・ロイターの短編小説を読んでくれた。彼女のエキゾチックな口からメクレンブルク地方の低地ドイツ語が語られるのは、なんとも異様な感じだったが、しかし、家のなかで彼女くらい上手に低地ドイツ語を操れる者はなかった。…勿論私は、演奏している母のそばにいるのが最も好きだった。母のベヒシュタイン・グランドピアノは、サロンになっている明るい角の部屋に据えてあった。…そして私は、そのライト・グレイの合わせ縫いになっているひじ掛け椅子の一脚に数時間もうずくまって、母の巧みな、感覚的に繊細な演奏に耳を傾けたが、この演奏は、シヨパンのエチュードやノクターンの場合に最もよく真価が発揮されたと言えよう。」（「母

のことをトーマス・マン自身も述べている。先の「精神的な生活形式としてのリュウベック」においては、トラウヴェミュンデにおける音楽の体験は次のように描かれている。「ここで、海と音楽とが私の中で、永久にある理念的結合、感情的結合になり、そしてこの感情的結合が理念的結合があるもの——すなわち物語に、叙事的散文になりました。——叙事詩、これは私にとつてはつねに、海と音楽との概念に密接に結び付いた、ほとんどこのふたつのものが組み合つてできた概念でした。：私も、海や、そのリズム、その音楽的超絶が、何らかの形で私の著書のいたるところにあると考へたいのです。」そしてこの海の安らぎによつてハノーはしばしば眠りに襲われるという。「ハノーは海からいつもなんと和らいだ、満ち足りた、そして気持ち良く規則正しく鼓動する心臓をもち帰つたことであろう！そしてハノーは：食事を済ましてしまふと、：ベット古くて薄くなつたリンネルに再びくるまる。するとたちまち、まさにこの満ち足りた心臓の和やかな力強い鼓動と夕べのコンサートの控え目なリズムに合わせて、恐怖に襲われることもなければ、発熱も伴わずに眠りがハノーの上に降りて来る。」トーマス・マンも実際、眠りを愛した。眠りに対する敬愛を彼は「甘い眠り」（一九〇九年）というエッセイのなかで描いている。夜は一日の苦勞や悲しみ、不安を引き寄せ、疲れた身体に活氣と慰めをもたらしてくるものであり、彼には夜への愛好の気持ちがあつた。つまり、トーマス・マンにおいては、海、音楽、眠り、夜は互いに緊密に結び合うものであり、それらは生涯にわたつて、彼の無意識な思想や作品の流れを貫くものだった。そうした全生涯を貫く思想の根底を、彼はこの少年時代にトラウヴェミュンデで経験したのだった。このような、毎夏のトラウヴェミュンデでの海の体験は、そして海の風景や雰囲気は精神的にトーマス・マンの心に最後まで刻みこまれることになる。彼は一九三一年以来、社会の変動のためこの地やリュウベックを訪れることはなかつたが、死の二年前の一九五三年、実に二十二年ぶりに、いろんな人々の努力によつて故郷と再会することができた。一九五三年六月十日、七十六歳のトーマス・マンはトラウヴェミュンデとリュウベックに滞在するが、その時の心境を彼は、同年七月四日の新聞「リュウベッカー・フライエ・プレッセ」のなかで「トーマス・マンの一書簡」と題して次のように述べている。「ハンブルク訪問を機会にリュウベックとトラウヴェミュンデにも

な小さな物音をも不思議な意味にまで高めずにはいない、あののびのびとした静かな潮騒の間こえる平和に包まれて、ふたりは海辺を歩いた。」(第三部第八章)。またトーニがこのトラウヴェミュンデを離れるときの描写はハノーの場合と同じものである。「トーニは頭を馬車の隅に押し付けて、窓の外を眺めていた。空はうっすらと白い雲に覆われ、トラウヴェ河にはさざ波が立ち、慌ただしく風に追われていた。時折、小さな雨粒が窓ガラスにぱらぱらと当たった。表通りを出はずれるあたりでは、人々が自分たちの家の戸口の前に座って網を繕っており、素足の子供たちが駆け寄って来て物珍しげに馬車を眺めた。この子たちはずっとこの土地を離れないのね。」(第三部第十二章)。

同じようなトラウヴェミュンデでの思い出はトーマス・マンの他の作品にも見られる。例えば、一九一〇年の短編小説『ヤッペとド・エスコバルとが殴り合った様子』では、語り手の「私」が、十五歳のふたりの少年のトラウヴェミュンデでの殴り合いを見に行くという設定であり、夏休みのトラウヴェミュンデが舞台となり、その語り手も「スイス館」に滞在している。また『トーニオ・クレーゲル』では、主人公トーニオは直接その名前は挙げられていないが、このトラウヴェミュンデを船から次のように見詰めている。「そのうちに海が開けてきたので、彼は子供の時分に海の夏らしい夢をそつと窺うことのできた、あの岸辺を遠方から眺めた。灯台のまたたきと、両親と一緒に宿をとっていた海辺ホテルの窓の灯を眺めた。：バルト海。」さらに、回想小説『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』(一九五四年)でも、主人公のフェーリクス・クルルは子供時代の遊びや即興劇についてこの海辺で、とりわけ音楽堂のそばで語っている。(第一部第三章の終わり辺り)。

このようにトラウヴェミュンデでのトーマス・マンの少年時代の体験は作品のなかでもしばしば描かれる。トーマス・マンとトラウヴェミュンデ、その少年時代に養われた関係は決して後においても消えることなく、彼の生涯の間ずっと続いた愛情関係と言ってもよく、しかもそれはつねに根源的に、お互い影のように連れ添ったのである。両者は決して表面的な少年時代の激しい愛情関係というのではなく、深い内面的な関係を保ち、作家トーマス・マンの生と作品の根本的な支柱となつたと言えよう。換言すれば、彼の作品はトラウヴェミュンデの体験から生まれたといっても過言ではない。そのような意味

く初めて聴くオーケストラ音楽を、倦かず私の魂に引き入れながら音楽堂の階段にうずくまっていた。ここで、トラウヴェミュンデで、休暇時の天国で、私は疑いもなく私の一生の最も幸福な日々を何日も何週間も過ごしましたが、その間の深い満足と何も望むことのない状態とは、今日ではもはや貧しいとは呼び得ない私の生涯にその後起こったどのようなことによつても凌駕されなかつたし、忘れさせられなかつたものです。実際、私は海に、私の少年時代の海に、リユーベック湾に、幾分の感謝の意を表してきたと思います。私が用いたものは、結局、リユーベック湾のパレットでした。そして、私の色が不透明に輝きなく控え目に見えるとすれば、それは、子供で幸福であつたときの私の目が銀色に輝くぶなの幹の間から、パステルの鈍色を帯びた海と空とをじつと見詰めたせいかもしれません。」（『精神的な生活形式としてのリユーベック』）。トーマス・マンのトラウヴェミュンデ体験は以上のものであつた。

しかしまた私たちは、前述したようなハノーのトラウヴェミュンデ体験と共に、この小説ではそれ以前、十九世紀半ばのハノーの生まれる以前に、トラウヴェミュンデが美しい恋物語の舞台であつたことを思い起こすだろう。この小説の第三部に練り広げられる、トニー・ブッデンブロークと夏休みで帰省していたゲッティンゲン大学の学生モルテン・シュヴァルツコップとの淡い恋物語である。トニーはグリーンリヒからの求婚を逃れて、この地で過ごしたのであるが、モルテンと知り合い、連れ立って日光浴をしたり、海に入ったり、丘に登ったりして夏を楽しむ。ふたりの過ごした夏の出来事は、この小説の中では美しい恋の場面となつてゐる。「ふたりは浜の波打ち際沿いに歩いた。そこは砂が潮に洗われて滑らかに固まつてゐるので楽に歩けた。小さなありふれた白い貝や、細長くて大きなオパールの輝きを放つ貝がちらばり、その間には、つぶすとぷつんと音を立てる丸い中空の実のついた、黄緑色の濡れた海藻が打ち上げられてゐるかと思えば、水色の普通のくらげや、泳いでいるときに触ると足に激痛を覚える赤黄色の有毒な横たわつてゐた。…ふたりは長く連なる波のリズミカルな音をかたわらに聞き、顔にさわやかな潮風を受けながら歩いた。遮られることもなく気ままに吹き付ける潮風は、耳をおしつづみ、快いめまい、けだるい放心を引き起こす。…遠くのものであろうと近くのものであろうと、どん

さらにこの小説ではハノーの海との体験は次のように描かれている。「海辺の夏休み……これがどういう幸福を意味するか、ひろい世界の一体誰が理解しているだろうか。重苦しく心配だらけで単調な、いつ果てるとも知れない授業日が終わって四週間も、海草の匂いや穏やかな潮騒に包まれて、平和な、憂いのない静かな生活が続く。……四週間といえば、その始まりには見通しもつかなければ見積もることもできず、それが終わるなどということは考えられないし、終わりを口にするのは神を汚す野蛮な行為と言えるほどの期間である。」「狭いつなぎの建物でつながって、喫茶部とホテル本館とが一直線をなしている二棟のスイス風家屋のうちの一棟のなかで迎える最初の朝のなんという目覚め……身中に沸き上がり、心臓をきゅつと締め付ける漠とした幸福感が彼の目を覚まさせる。……目を開いた彼は、むさぼるような幸福そうな視線で清潔な小部屋の、古いフランケン風の家具をとらえる。……夢見心地の、歓喜に満ちた惑乱の一瞬——そして自分がトラウヴェミュンデにいることを、四週間という見積もりのきかない期間トラウヴェミュンデにいるのだということを受得する。彼はじっとしたまま動かない、黄色の木で作った狭いベットの古びてひどく薄く柔らかくなった敷布の上に静かに仰向けに寝たまま、時々改めて目を閉じて深くゆっくり呼吸するたびに、胸が幸福と不安に震えるのを感じるのだった。」このように、ハノーはトラウヴェミュンデにることなど意識することなく目覚め、「夢見心地の、歓喜に満ちた惑乱の」ひとときに浸っている。静かに何もすることのない気楽さの中で、保養所の庭の砂利道が熊手でかきならされる音や、巻き上げブラインドと窓の間に引っ掛かっている一匹の蠅のブンブンという音に耳を傾けている。彼はこの「落ち着いた、手の行き届いた、上品な、世間から遠ざかっている生活」をなにもまして好んだ。そこでは限りなく豊かな食事、保養地の教会の朝、午後、夕べの音楽、クロツケーの一勝負、家畜小屋への訪れなどが繰り返され、まさに二十八日だけ子供の夢が続いたのであった。こうした体験はトーマス・マンのものでもある。彼は五十歳のとき少年時代の海を次のように回想している。「私は海を、バルト海を、子供のときにトラウヴェミュンデで、ビーダーマイヤー式の古いホテルとスイス風の家屋と音楽堂とがあった四十年前のトラウヴェミュンデで初めて見ました。……私はツゲの夏らしい薫りを嗅ぎながら——音楽を、どんな性質のものであるうとも、ともか

浴をやり、午後にはホテルの庭園の向こうにあった音楽堂のかたえにうずくまって、海水浴にも劣らない情熱を傾けて愛好した音楽に聞き惚れた。この避暑生活は定食の品数も豊富で、世話の行き届いた安全で快適な牧歌気分が何とも言えないほど私の性にあつたのである。この牧歌気分は私が生まれながらにもつていて、ずっと後になつてやっとどうにか矯正した夢想的な怠け癖を助長したものだ。夏休みの当初にはいつ終わるとも見通しのつかなかった四週間が過ぎ去り、帰宅して日常生活を始めなければならなくなるたびに、私の胸は自分をあわれむ感傷的な苦痛に引き裂かれるのであつた。」この描写の後半からは、あの「ブッデンブローク家の人々」の小さいハノーの体験が思い出されよう。「荷物を積んだ辻馬車がホテルの前に止まり、その日が来てしまった。ハノーは、朝のうちに海と浜辺にさよならを言つておいたが、今度はチップを受け取る給仕たちや音楽堂やばらの花壇や、この夏全体に同じ挨拶を告げた。そしてそれから、ホテル従業員が頭を下げるうちに、馬車は動き出した。馬車は、トラウヴェミュンデの町に通じる並木道を通過し表通り沿いに進んだ。：ハノーは頭を馬車の隅に押し付けて、自分と向かい合いに生き生きした目、白い髪、骨張った身体つきで反対向きの席に座っているイーダ・ユングマンを見過ごして、窓の外を眺めていた。朝の空はうっすらと白い雲に覆われ、トラウヴェエ河にはさざ波が立ち、慌ただしく風に追われていた。時折、雨粒が窓ガラスにばらばらと当たった。表通りを出はざれるあたりでは、人々が自分たちの家の戸口の前に座つて網を繕つており、素足の子供たちが駆け寄つて来て物珍しげに馬車を眺めた。この子たちはずつとこの土地を離れないのだ。：馬車が最後の家並みを後にする頃、ハノーは身を乗り出してもう一度灯台を見やった。やがて後ろにもたれかかると、目を閉じた。へ来年またね、ハノー。Vイーダ・ユングマンは深い、慰めの響きのこもる声で言った。しかしこの励ましの言葉をかけられたためにかえつて、ハノーのあごはわなわなと震え始め、長いまつげの下からは涙が溢れ始めた。」(第十部第三章)このようにハノーは、トラウヴェミュンデからの帰郷の際に、自分の短い人生(十五歳で死去)を予感するように、初めて別れと損失の悲しみを体験する。先の「略伝」に重ね合わせてみると、トーマス・マンの作品がいかに自伝的性格をもっているかが分かる。

第四章 少年時代（一八八二—一八九四年）

①私立「ドクトル・ブセニウス予備高等学校」（一八八二—一八八九年）

一八八二年から一八八九年まで、トーマス・マンは、父も兄も通ったフライシユハウアー通りのブセニウス博士の「六
制ギムナジウム」（下級三学年、中級三学年）である予備高等学校（プロギムナジウム）に通った。学校に関してはしばし
ば、「私は学校というものが嫌いで、学校の要求には最後まで応じなかった」というような彼自身の証言も残っているが、
これは後の実科高等学校の頃のことと思われる。この時期、彼は二度も進級をストップさせられているからである。

ここではまず、彼の少年時代の特筆すべきことから述べよう。それは彼の海の体験である。リユーベックの北東にある海
水浴場トラーヴェミュンデでトーマス・マンは、学校に上がる頃から夏休みを過ごし、そこでの体験は生涯彼の作品に強く
刻みこまれることになる。生まれ故郷リユーベックは「精神的な生活形式」を養ったが、トラーヴェミュンデは彼の「少年時
代の天国」であった。トラーヴェミュンデはトーマス・マンにとってどのような体験であったか、そしてそれはどのような
文学作品のなかに取り入れられ、文学化されているのか。少年時代の大きな体験であった海とトーマス・マンとの、そして
トーマス・マン文学との関連を少し考えてみよう。

マン一家は一八八二年から一八九一年にかけて毎夏規則的に、七月半ばから八月半ばのおよそ一ヶ月間家族で、トラーヴェ
河がバルト海に注ぐ河口の海水浴場トラーヴェミュンデに避暑にやってきた。この地にはこの時期になると、大部分近くの
リユーベックからやってきた裕福な商人の家族が集まり、賑やかな避暑地生活をした。ここは当時まだそんなに整備されて
いなく、自然な状態が残っていたが、評判の喫茶店（コンデイトライ）があり、小さな一戸建ての音楽堂があった。マン一
家は、この地の保養センターのすぐ近くの、古い二階建のホテル「スイス館」のひとつで過ごした。その時の海での体験が
どのようなであったかについて、トーマス・マン自身、一九三〇年の『略伝』の中で次のように語っている。「少年時代に一
番明るく楽しかった時はといえば、毎年トラーヴェミュンデで過ごした夏休みで、午前にはバルト海の入江の浜辺で海水

りしなければならなくなった。都市貴族の妻として、彼女には「家柄にふさわしい態度を取る」ことが要求されたのである。夫がリユーベックの最高機関である市参事会員に選ばれてからは、さらに彼女には公的な態度が強く求められるようになった。つまり彼女には、「ブッデンブローク家の人々」の冒頭にもあるように、いろんな種類の公的な晩餐を催すことや他の家庭でのこうした催しに参加することが義務として再三求められた。そのため子供たちは子守女に委ねられることが多くなつた。そのこともあって、子供たちは祖母のエリーザベトに親しみを感じ、メング通り四番地の彼女の家をしばしば訪れた。そのため後のトーマス・マンの『生の経歴 一九二六』においては、この「十八世紀に建てられた、ロココ調の切り妻壁のへ主よ、守りたまわん」と格言の刻まれている古い家族の家」は「第二の我が家」と呼ばれている。また小説『道化者』のなかではこの標語は「祈り、そして働け」に変わっているが、そのほかのこの家の様子、広い石造りの踊り場、白いラック塗りの木の歩廊、柱廊、古典的な壁布、青い背景に浮き出る白い神々の姿のある居間などはすべて、そのままに忠実に描かれている。そしてこの新しい家は、心行くまで夢想到にふけるためのトーマス・マンの「絶好の隠れ家」となっていくのであつた。「壁と建物に囲まれたこの家の中庭は、家の裏手にあつたが、玄関の戸が開いていさえすれば、板石を張り詰めた、天井が高く陰気臭い通路を通過して直接に庭に行くことができた。庭の隅には、まだくるみの樹が立っていた。…子供たちにとっては、この荒れ果てた場所は願ってもない隠れ家だつた。両親の家にはそんな場所はなかつたからである。」(クラウス・シユレーター「トーマス・マン」)。幼年時代のトーマス・マンを端的に表現する文章を、繰り返しもなるが、最後に引いておこう。「幼年時代は荒い風の当たらない幸福なものだつた。兄弟姉妹は男二人、女二人の五人で、父が自分や家族のために建てた市内の優雅な邸で育てられたが、マリーエン教会の近くに昔からの家屋敷があつて、そこを第二の我が家にしてた。そこには父方の祖母が一人で住んでいたのだが、今日ではへブッデンブロークⅡハウスⅤということになって、物好きな旅人の訪れる場所となっている。」(『略伝』)。

に苦心しました。また、アキレウスになって、否応無しにヘクトルを演じさせられた私の妹をつかんで容赦なく三度トロイの市壁のまわりを引きづりまわしました。でも、ゼウスになったときは、小さな赤いラック塗りの卓を神々の居城に見立てて、そのうえに立ち、巨人族がオッサ山の上にペリオン山を積み上げようと徒労を続けているのを目の当たりにしているかのように、おまけに鈴まで縫い付けた赤い手綱を手にして、いかにも腹ただしげにしきりに電光を発したものです。」このように、彼の幼年時代には神話の世界への没頭があつたが、それは彼を、「穏やかな満足に浸りながら、なにも奪われることのない自分の空想の自由な力を自覚する」ように強く促した。「実際には、それは△遊び▽ではなかつた。むしろ、大胆かつ注意深く組み立てられた幻影の世界であり、幼年時代の神話のなかでのひとつの神話的体験だつた」(クラウス・マン「転回点」)のである。

このように幼年時代、トーマス・マンは素晴らしい玩具に興じ、人形芝居に没頭し、神話の世界に遊び、母に本を読んでもらい、また音楽好きの母の歌やピアノ演奏に耳を傾けたりして、「空想の自由な力」を養い夢想的な少年に育っていく。トーマス・マンは後において、「私の記憶のなかには、幼遊びと芸術的修練のあいだに、いかなる断絶、いかなる顕著な境界もありません」(「自分のこと」)と語り、芸術に戯れることが幼年時代の彼の遊びであり、それが自分の作家としての生き方に大きな影響を与えていることを指摘している。「芸術家としての私の成り立ち、私の芸術家歴を尋ねられますと、私はその根元を、その最初の萌芽と胎動を、自分と自分の心に問うて見るほかありません。すると、そうしたものが私の幼時の遊びの中に見いだせるのです。」(「自分のこと」)。

さてトーマス・マンの父の市参事会員トーマス・ヨーハン・ハインリヒ・マンは、一八八一年、ベッカーゲルベ五十二番地に土地を購入し、六人の家族と、たくさんの女中や召し使いのために、堂々とした「身分や地位にふさわしい」壮麗な館を建てた。この家は一九四二年の爆撃によって破壊されて、現存してはいない。この新しい家にマン一家は一八八三年から住み、ここは以前の家とは異なつて、華やかさの伴う社交の場となるが、それにつれて、母は忙しくこの大邸宅を切り盛

づいていて、兄ハインリヒもそれに早くから興味を示していた。祖母からの贈り物の人形芝居の舞台は、幼い二人の兄弟の仲を強く結び付け、彼らは共同で「風変わりな音楽劇」を作り、両親や叔母たちの前で上演したのだった。ハノー・ブッデンブロークはクリスマスの夕べにプレゼントとして、この人形芝居を待ち焦がれており（第八部第八章）、自伝的小説「道化者」（一八九七年）においては、人形芝居上演の際の様子が生き生きと描かれており（第二章）。また、この小説の主人公については、「全く、こういう精根を尽くした上演を終えて陶然としながら舞台をしまいこむとき、いつも私は、最善の能力を傾けた作品を勝利のうち成し遂げた有能な芸術家が感ずるにちがいない幸福な倦怠が身体一杯に満ちて来るのであった。——この遊びは十三か十四の歳まで私の何より好きな仕事だった」と説明されるが、これは明らかに作者トーマス・マンの幼年時代を彷彿させるものである。トーマス・マンが人形芝居の楽しみから決して離れられないほどに没頭したことは次の彼の言葉からも見て取れる。「新米の、しかも劇詩人とは義理にも言えない作家の生活において、人形芝居がどのような役割を演じるかは、注目に値することです。例えば「ヴィルヘルム・マイスター」におけるゲータや「緑のハインリヒ」におけるゴットフリート・ケラーの告白や回想を思い出していただきたい。私は、いつかは成長してこうした遊びにも満足しなくなるといふ考えが私には不可能に思えたほどに、この遊びを熱愛しました。ドアを閉めて風変わりな音楽劇を上演しているときなど、いままで使っていた声域を替えて、持ち前の低音を投げ立てるのが私には楽しみでしたし、また低音歌手となってもまだ人形芝居の前に座り続けていようとする私を見て、いかにもおかしいと、兄が私を非難したときはひどく怒ったものでした。」（「自分のこと」一九四〇年）。トーマス・マンは人形芝居のおかげで「こよなく素晴らしい遊びの喜び」を知ることになる。それはギリシア神話の神々をまねての遊びだった。彼は自分の揺り木馬を「アキレウス」と命名し、ホメーロスやウエルギリウスの世界に没頭し、母の読んでくれる本からトロイやイータカやオリュンポスに通じることができた。彼はそれらをひどくむさぼるように内部に吸収し、遊びながら演じたのだった。「私はヘルメスになって、紙で作った翼のある靴をはいて室内を跳び回りましたし、ヘーリオスとなって、靈妙な頭のうえに載せた金ぴかの光輪の釣り合いを取るの

②カタリーネウム実科高等学校（一八八九―一八九四年）

③学友雑誌「春の嵐」（一八九三年）

④短編小説「幻想」（一八九三年）

（以上、今回掲載分）

第三章 幼年時代（一八七五―一八八一年）

一九三六年の「生の経歴」における誕生時の表現にも見られるように、トーマス・マンの幼年時代は「保護され、幸福であつた。」彼は第二子のもつ長所に十分あずかることができ、兄ハインリヒがいることにより、彼の道は人生においても文学においても平坦であつた。後には、とりわけトーマスの結婚後や第一次世界大戦前後においては確かに兄弟の確執はあつたが、ハインリヒの影響は強くトーマスのなかに宿つた。トーマス・マンはこうした幼年時代について、しばしば文学的に様式化している。

一九〇四年の『子供の遊び』という自伝的な作品において、トーマス・マンは子供の頃「とても素晴らしい玩具」をもつていたことを回想している。その玩具には、勘定台や秤のある店、植民地産の食料雑貨品が詰まっている引き出し、父の所有するものと同じような穀物倉庫、そしてそこにはクレインさえも備わり、ハンドル操作で袋や梱を巻き上げることが出来るようになっていた。それらの玩具は、必ずしも父が望むような商人に対する野心というものをトーマス・マンに目覚ますことはなかったが、商人に対する尊敬をトーマス・マンのなかにはつきりと根付かせることができた。それは「ブッデンブルーク家の人々」において間接的に、「精神的生活形式としてのリユーベック」においては直接的に見て取ることが出来る。また人形芝居も、トーマス・マンの幼年時代の大きな要素として位置付けられる。人形芝居は家族のなかにしっかりと息

若いトーマス・マン〔二〕

——小説と小説家のあいだ——

岡光一浩

目次

若いトーマス・マンへの道 ——はじめにに代えて——

第一章 若いトーマス・マンを「読む」ということ

第二章 若いトーマス・マンをどう読むか

第三章 「世紀末」ドイツ文学事情

リューベック時代（一八七五—一八九四年）

第一章 出自とその周辺

第二章 故郷リューベック

以上、「山口大学文学会志」第四十七卷（一九九六年十二月）掲載

第三章 幼年時代（一八七五—一八八一年）

第四章 少年時代（一八八二—一八九四年）

①私立「ドクトル・ブセニウス予備高等学校」（一八八二—一八八九年）